

平成 23 年度市内遺跡確認調査報告書

平成 24 年 3 月  
指宿市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、平成 23 年 7 月 1 日から平成 24 年 3 月 31 日まで実施した鹿児島県指宿市に所在する敷額遺跡等の発掘調査報告書である。

2. 発掘調査は、指宿市教育委員会で実施した。調査は渡部徹也が担当し、鎌田洋昭の協力を得た。

調査組織は以下のとおりである。

発掘調査主体　　指宿市教育委員会

発掘調査責任者　　指宿市教育委員会

発掘調査担当組織員　指宿市教育委員会

教　育　長

池田　昭夫

教　育　部　長

吹留　賢良

社会教育課長

馬場　久生

社会教育係長

野元　伸浩

社会教育係主査

濱田真也

社会教育係主事

前原　望

社会教育係主査

奥村　光郎

社会教育係主査

池水　拓也

文化　係　長

福ヶ迫　忠

文化係参事補

迫田　優子

文化　係　主　査

上薗　浩司

同　　上

鎌田　洋昭

同　　上

渡部　徹也

発掘調査・整理作業員　清　秀子、竹下珠代、亀之園清子、鎌田真由美

3. 本書の編集、図面作成、写真撮影は、渡部徹也が行った。

4. 調査、及び報告書作成に要した経費 1,000,000 円のうち、50%は国、10%は県からの補助を得た。

5. 図中に用いられている座標値は、国土座標系第Ⅱ系に準ずる。

6. 遺物観察表、遺物実測図、遺構図の表記凡例は、『橋牟礼川遺跡Ⅲ』（1992、指宿市教育委員会）と『水迫遺跡Ⅰ』（2000、指宿市教育委員会）に準ずる。観察表の特殊な表記については下記のとおりである。

土器の混和材【カ：角閃石、セ：石英、ウ：雲母、金：金雲母、白：白色粒、黒：黒色粒、赤：赤色粒】

土器部位・法量【口：口縁部、口縁部径、肩：肩部、肩部最大径、胴：胴部、胴部最大径、底：底部、底部径】

調整【内：内面、外：外面、口唇：口唇部、突：突帯部、底：底面、脚内：脚台内面、脚端：脚台接地面】

色調【内：内面、外：外面、肉：器肉】※遺物のマンセル値は、土色計 SCR-1 を使用し測色した。

7. 発掘調査で得た全ての成果については、指宿市考古博物館時遊館 C O C C O はしむれで保管し、活用する。

## 目次

### 敷領遺跡編

第1章 経緯と調査概要.....	1
第1節 遺跡の位置と環境.....	1
第2節 調査の履歴と調査に至る経緯.....	1
第2章 遺跡の層序.....	2
第3章 調査区の選定と調査の概要.....	5
第1節 調査区の選定.....	5
第2節 調査の概要.....	5
第4章 調査成果.....	6

### 小田遺跡（中小路地点）編

第1章 経緯と調査概要.....	11
第1節 遺跡の位置と環境、調査の履歴.....	11
第2節 調査の履歴と調査に至る経緯.....	11
第2章 調査の成果.....	12
迫田遺跡隣接地編	
第1章 経緯と概要.....	17
第1節 遺跡の位置と環境.....	11
第2節 経緯と採集遺物.....	18

# 敷 領 遺 跡 編

## 第1章 経緯と調査概要

### 第1節 遺跡の位置と環境

敷頭遺跡は、指宿市十町小字敷頭、及びその周辺に広がる弥生時代から平安時代にかけての複合遺跡である。

遺跡は、指宿市街地が広がる火山性扇状地のほぼ中央、海拔4~10m前後の標高にあり、火山災害遺跡として知られる国指定史跡指宿櫻井礼川遺跡の北北西約2kmの地点に位置する。敷頭遺跡の立地する扇状地は、北側を流れる二反田川と南側を流れる柳田川の両小河川に挟まれ、海岸に向かって緩やかに傾斜している。

### 第2節 調査の履歴と調査に至る経緯

敷頭遺跡での調査履歴は以下のとおりである。

年 度	調査目的	内 容
平成7年度	遺跡範囲確認調査	874年3月25日の開闢活噴出物「紫コラ」で埋没した水田跡などを検出。
平成8年度	市宮・県宮住宅の建替えに伴う発掘調査	874年水田を面的に確認。奈良~平安時代の礎柱建物跡、縦柱建物跡等の遺構や多量の須恵器・土師器、墨書き土器（「籠」「智」）を発見。古墳時代の竪穴式住居跡、弥生時代のベッド状遺構を伴う竪穴式住居跡を検出。
平成9年度	温泉タンクの設置に伴う発掘調査	874年水田と奈良~平安時代の柱穴群を確認。
平成10年度	市宮・県宮住宅の建替えに伴う発掘調査	水田跡、奈良~平安時代の建物群の広がりを確認。7世紀第4四半期の開闢活火山灰「青コラ」で埋没した円鏡「弥次ケ湯古鏡」を発見。

平成16年度には、お茶の水女子大学鷹野光行教授を研究代表者とする科学的研究費補助金「特定領域研究」「わが国の火山噴火罹災地における生活・文化環境の復元―九州を中心にして―」の研究プロジェクトに指宿地域が選定されたことから、以下のように敷頭遺跡の確認調査を実施した。なお、下表で「大学」と表記したものは、お茶の水女子大学・鹿児島大学の共同調査である。

年 度	調査主体	内 容
平成17年度	東京工業大学	平成8年度調査地点南側で地中レーダ探査：平安時代の開闢活噴火で埋没した広範囲にわたる水田跡と真北方向を向いた軒の配置を確認。
	市教委・大学	2箇所のトレンチを設定、埋没水田の発掘調査を実施。
平成18年度	市教委	平成10年度調査地点北側において確認調査を実施。畠跡を検出。
平成19年度	市教委	西側一帯の狀況把握のため、平成18年度調査地点の約50m西で確認調査を実施。大型の柱1条（大区画の可能性あり）と小型の柱2条を検出。
	大学	市教委調査地点の西側調査区（柄田地点）で畠跡を検出。
平成20年度	市教委	874年3月25日の開闢活噴出物「紫コラ」で埋没した道路等を検出。
	大学	874年3月25日の開闢活噴出物「紫コラ」で埋没した礎柱建物跡を検出。
平成21年度	市教委	874年3月25日の開闢活噴出物「紫コラ」で埋没した建物跡と見られる壇状遺構を検出。
	大学	874年3月25日の開闢活噴出物「紫コラ」で埋没した礎柱建物跡を完掘。
平成22年度	市教委	居住域と生産域の境界付近とみられる地点を確認。

敷頭遺跡地内の平成7年度以降の各調査において、この地域において874年段階で大規模な水田が造営されていたことが知られてきた。平成20年度は、このような大規模な生産地を経営した集団の集落所在地を確認するため、5地点において確認調査を実施し、平成21年度には、火山灰で埋没した建物構造の存在を確認するに至った。平成22年度の調査では、居住域と生産域の境界付近とみられる地点を確認したが、今後も引き続き集落範囲やその詳細を把握することが課題である。

第2章 遺跡の層序

敷設遺跡の層序は、橋牟礼川遺跡の基本層序とほぼ同様である（図2）。ただ、開聞岳火山灰層については降灰範囲の中心部分から北にやや外れていることもあります。堆積厚が橋牟礼川遺跡に比べ薄いことが特徴である。同時に、874年3月25日の噴火による降下火山灰堆積層（通称「紫コラ」）では、二次堆積物が発達している場合が多い。

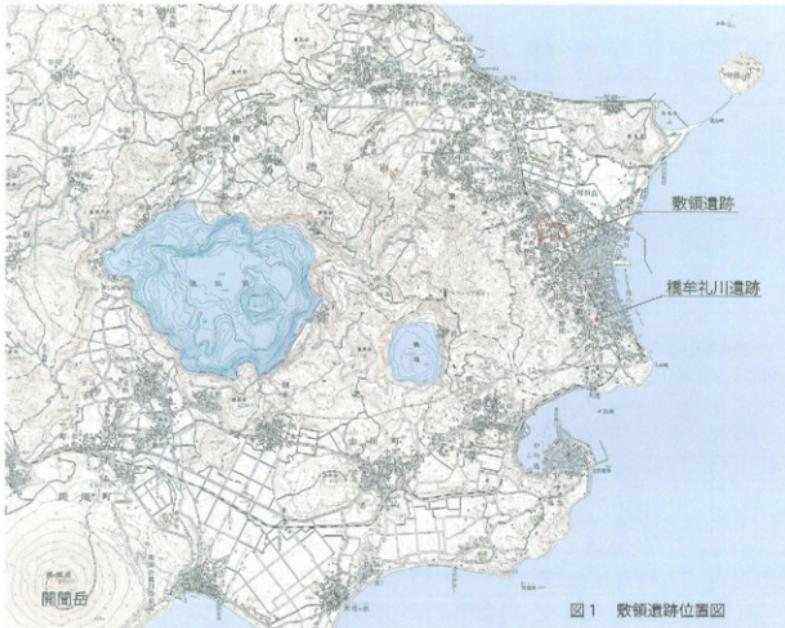


図1 數値遺跡位置図



図2 層位相式柱状圖

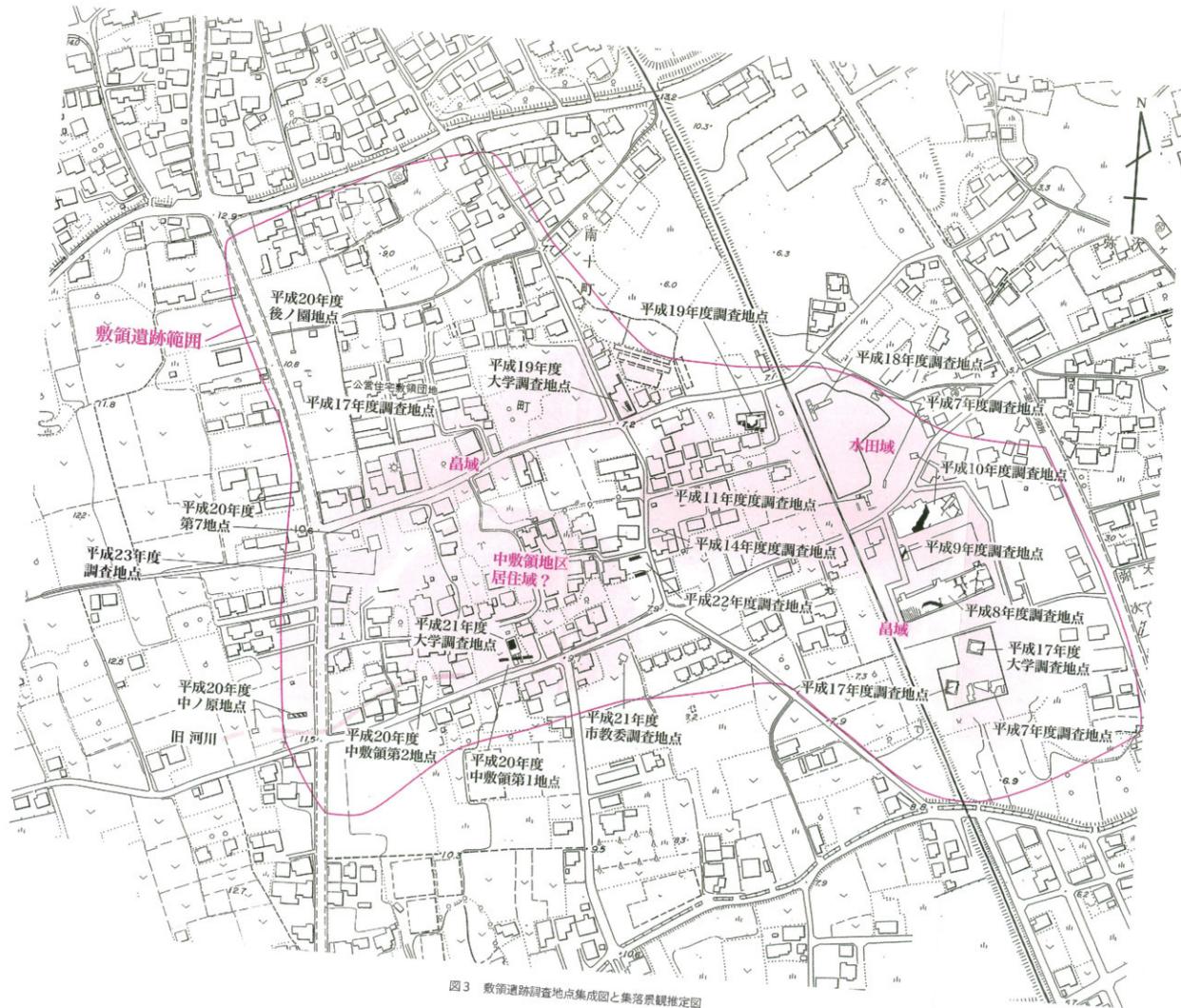


図3 敷領遺跡調査地点集成図と集落景観推定図

### 第3章 調査区の選定と調査の概要

## 第1節 調査区の選定

これまでの調査によって、敷館遺跡では、874 年段階で東側のより低い土地に水田が造営されていることが判ってきた。21 年度においては、集落域についての情報を得るため、遺跡内のやや標高が高い西側一帯に注目し確認調査を実施、敷館遺跡中敷館第 1 地点（平成 21 年度大学調査地点）では 874 年の開闢岳の火山災害で埋没した建物跡を検出した。また、その東側約 50m の地点（平成 21 年度市教委調査地点）では、同じく火山災害で埋没した何らかの作業場と考えられる壇状遺構が検出され、当該地が居住域である可能性が高まった。平成 22 年度の調査では、旧地形が大きく傾斜する状況が確認され、調査地点が居住域と生産域の境界付近である可能性がてきた。こうした調査成果を踏まえ、居住域が北西側にどこまで広がるのかを確認するため、平成 20 年度に調査した第 7 地点の東側の地点を選定し調査することになった。

## 第2節 調査の概要

調査地点は宅地であり、かつて木造家屋があったが、現在は取り壊され更地になっている。木造家屋があつた部分を避ける形で、敷地内の北端にトレンチを設定し調査を行った。

南端に設定した1トレチは、7.5m×12mで、紫コラの上面、及び第6層上位の一部を確認した。調査地点では、表土の直下に紫コラが見られたが、大部分は削平を受けていた。また、一部には攢乱を受けている箇所があった。旧住宅の建設または解体の影響によるものと思われる。部分的に確認した第6層上面には遺構は見られなかった。

なお、調査地点では、古墳時代の成川式土器が表面採集できた。いずれも破片資料であるが、攪乱に伴い割り上げられたものと考えられる。平成20年度に調査した第7地点では、多量の成川式上器の他、竪穴式住居とみられる遺構を検出していることから、今回の調査地点にまで同時期の集落が広がっている可能性が高い。採集した遺物のうち、器種が特定できたものについては、次章で報告する。

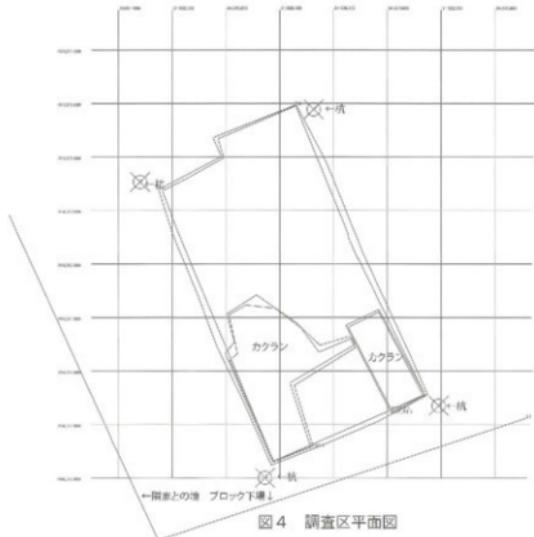


図4 調査区平面図

## 第4章 調査成果

表面採集した成川式土器のち、以下に器種が特定できた資料 12 点を報告する。

No.1 は菱形土器の口縁部の破片である。口縁部はわずかに外に開く。口唇端部は平坦で、外面に稜を形成する。外面にはハケメの痕跡がかすかに残るが、その後なで消されており、はっきりとしない。

No.2 は菱形土器の口縁部の破片である。口縁部はほぼ直行する。口唇端部は平坦で、外面に稜を形成する。外面には、ハケメの痕跡がかすかに残るが、その後なで消されており、工具の痕跡ははっきりとしない。

No.3 は菱形土器の口縁部の破片である。口縁部はわずかに内湾する。口唇端部は平坦で、内面に稜を形成する。内外面ともに工具によるナデ調整の痕跡がかすかに残る。また、内面の口唇部付近にわずかにユビオサエの痕跡が残る。

No.4 は菱形土器の突帯部の破片である。外面は風化が激しく磨滅している。断面が三角をなす突帯が 1 条めぐる。突帯には棒状の道具でキザミが施されている。

No.5 は菱形土器の突帯部の破片である。外面は風化が激しく磨滅している。断面が三角をなす突帯が 1 条めぐる。磨滅のため、判然としないが、突帯がつぶれている部分もあることから、なんらかの道具でキザミを施したものと推定される。

No.6 は菱形土器の突帯部の破片である。内面に工具によるナデ調整の痕跡がかすかに残る。断面が三角をなす突帯が 1 条めぐる。突帯には棒状の道具で等間隔に細かなキザミが施されている。

No.7 は菱形土器の底部の破片である。内外面ともに工具に調整の痕跡が残り、外面底部の突端部には、櫛状の工具痕跡が見られる箇所もある。底部は平底で、見込み部の縁付近には接合痕跡が残る。底径は 8.2 cm を計る。

No.8 は菱形土器の底部の破片である。内外面ともに工具に調整の痕跡が残り、外面底部の突端部には、稜をもつ。底部は浅い上げ底となる。復元低径は 9.6 cm を計る。

No.9 は菱形土器の突帯部の破片である。内外面ともに工具に調整の痕跡がかすかに残る。底部は浅い上げ底となる。

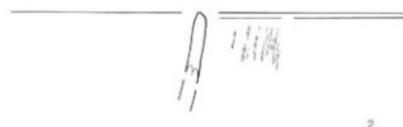
No.10 は菱形土器の底部の破片である。内外面ともに工具に調整の痕跡がかすかに残る。底部は上げ底で、底部の見込み部、中心付近には接合痕跡が剛撫に残る。

No.11 は高环の环部の破片である。内外面ともにミガキが施され赤色塗彩されている。口縁部は、大きく反り返りラッパ状になる。口唇端部は丸みを帯びる。环部の途中で「く」の字に鋭角に屈曲する。

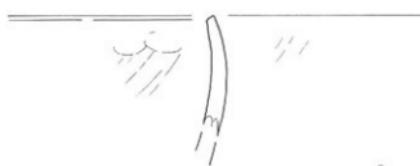
No.12 は菱形土器の底部の破片である。内外面ともに風化し磨滅している。底部は平底で、底径は約 4 cm を計る。



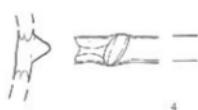
1



2



3



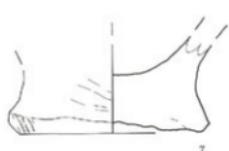
4



5



6



7



8



図5 遺物実測図①(S=1/2)

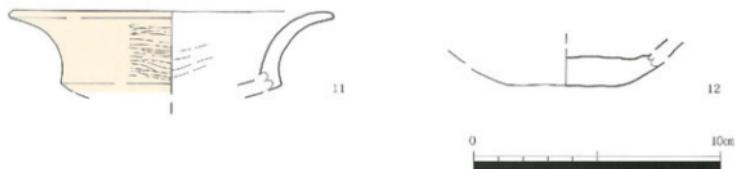


図6 遺物実測図②( $S=1/2$ )



表土除去の状況 1



表土除去の状況 2



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12

遺物写真

## 觀察表

固有	着色	層種	堆存容量(tm)	馬鹿	色外	色内	色用	色私	軽土特	泥水付	製造	その他	混合
1	塑性土岩	礁片	日母鶴	100t/3	2.5tBS/3	1.5tBS/2	-	-	砂透・泥透 透水性中等 含む	カ・芝 白・基 他	内:ナツ 外:工具によるツバのち ナツ ロ型:ヨコナツ	未成良好 焼きガム	
2	塑形土岩	礁片	日母鶴	100t/3	2.5tBS/3	2.5tBS/2	1.5tBS/2	-	砂透・泥透 透水性中等 含む	カ・芝 白・基 他	内:ナツ 外:ハメのちナツ ロ型:ヨコナツ	未成良好 焼きガム	
3	塑形土岩	礁片	日母鶴	100t/3	2.5tBS/3	2.5tBS/2	1.5tBS/2	7.0tBS/1	-	砂透・泥透 透水性中等 含む	カ・芝 白・基 他	内:ナツ 外:ナツ ロ型:ヨコナツ	未成良好 焼きガム
4	塑形土岩	礁片	奥母鶴	100t/2	10tBS/1	2.5tBS/3	1.5tBS/2	-	砂透・泥透 透水性中等 含む	カ・芝 白・基 他	内:ナツ 外:ナツ ロ型:ヨコナツ	未成良好 焼きガム	
5	塑形土岩	礁片	奥母鶴	100t/2	10tBS/2	5tBS/2	-	-	砂必透・透 透水性中等 含む	カ・芝 白・基 他	内:ナツ 外:マツブ ロ型:ヨコナツのちマツメ	未成良好 焼きガム	
6	塑形土岩	礁片	奥母鶴	100t/2	7.5tBS/3	2.5tBS/2	-	-	砂必透・透 透水性中等 含む	カ・芝 白・基 他	内:ナツ 外:ナツ ロ型:ヨコナツのち工具に よるナツメ	未成良好 焼きガム	
7	塑形土岩	礁片	奥母鶴	1/1周 年 1.5kg 8.5kg	7.5tBS/3	2.5tBS/2	5tBS/2	7.5tBS/2	砂透をカゲ かに含む 透水性・泥 透水性中等 含む	カ・芝 白・基 他	内:ナツ 外:ナツ ロ型:塑性調 (奥母鶴はヨコ ナツ)	未成良好	
8	泥形土器	礁片	春 1/4強 春 10kg 9.5kg	5tBS/2	2.5tBS/1	5tBS/2	5tBS/2	5tBS/2	砂透・泥透 透水性中等 含む	カ・芝 白・基 他	内:ナツ 外:工具によるナツのち ナツ ロ型: (泥鰌はヨコ ナツ)	未成良好	
9	塑形土岩	礁片	奥母鶴	7.5tBS/2	10tBS/1	7.5tBS/3	5tBS/3	5tBS/1	砂透をカゲ かに含む 透水性・泥 透水性中等 含む	カ・芝 白・基 他	内:ナツ 外:工具によるナツのち ナツ ロ型: (泥鰌はヨコ ナツ)	未成良好	
10	塑形土岩	礁片	奥母鶴	5tBS/2	7.5tBS/2	5tBS/1	-	-	砂透・泥透 透水性中等 含む	カ・芝 白・基 他	内:ナツ 外:ナツ ロ型: 黄麻繩 (編繩はヨコ ナツ)	未成良好	
11	高田	礁片	外割 1/5 板厚 度 10mm	2.5tBS/1	5tBS/2	1.5tBS/2	1.5tBS/1	-	砂透をカ ゲに含む 透水性 含む	セ・基 他	内:赤褐色調、ナツ 外:ヨコナツ、赤色糸剥 ロ型:ヨコナツ	未成良好	
12	塑形土岩	礁片	筑波山1周 年 1.5kg 4.5kg	-	2.5tBS/4	2.5tBS/3	2.5tBS/4	2.5tBS/4	砂透・泥透 透水性中等 含む	カ・芝 白・基 他	内:ナツ 外:ナツ	未成良好	

# 小田遺跡(中小路地点)編

## 第1章 経緯と調査概要

### 第1節 遺跡の位置と環境、調査の履歴

小田遺跡は、指宿市十町小田を中心とした平安時代の生産遺跡である。

遺跡は、指宿市街地が広がる火山性扇状地のほぼ中央にあり、火山災害遺跡として知られる国指定史跡指宿牟礼川遺跡の北西に接する。平成6年度の下水道事業に伴う発掘調査によって、西暦874年の開聞岳噴火で埋没した畠や畠の存在が確認された。この調査では、約60mにわたり南から北へと傾斜する畠田が検出され注目を集めめた。約60mの間に、5つの畦が確認され階段状に落ちており、段差は最大で50cm、南北の高低差は約1.8mを計った。

薩摩半島に班田制が導入されたのは、西暦800年とされている。小田遺跡で検出された生産構造は、南部九州の班田制の実態を考察する上で貴重な事例となった。

### 第2節 調査に至る経緯

平成7年度の下水道事業に伴う発掘調査によって、西暦874年の開聞岳噴火で埋没した畠が確認された隣接地において、NTTドコモの店舗建設が計画されたため、事前に試掘調査を行い、遺跡の有無を確認することとなった。

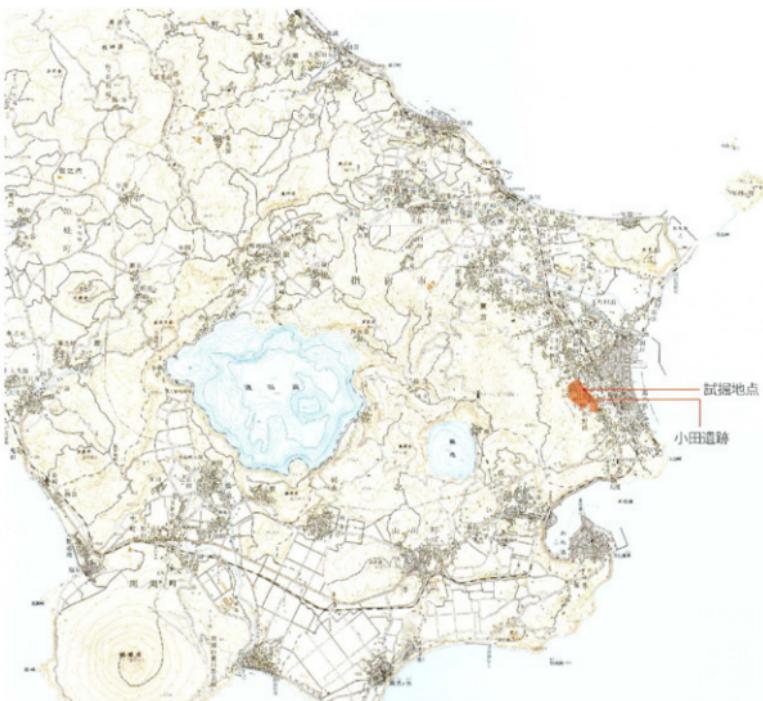


図7 小田遺跡位置図

## 第2章 調査の成果

小田遺跡の層序は、近接する橋牟礼川遺跡のものと変わらないため、前掲した橋牟礼川遺跡基本層序の層名をそのまま踏襲して報告する。

工事計画は、12か所に配置された2.2m四方の鉄骨基礎上に上屋が建つ設計で、基礎の深さは現地表面から1.4mを計るため、建設予定地内に、1.5m×3mの試掘トレンチを設定し、深さ約1.8mまで掘削し調査を行った。

現地表面から、約1.4mのところで、紫コラを確認した。紫コラの層厚は、20～30cmを計り、最下層には火山礫の堆積が見られた。下層の第6層上位は黒色を呈した土壌で、徐々に青コラの風化土壌へと変化を見せる。

第6層は30cm程度の堆積で、下層の青コラ上面まで掘り下げたが遺物の出土はなかった。また、畠等の生産遺構も検出されなかった。

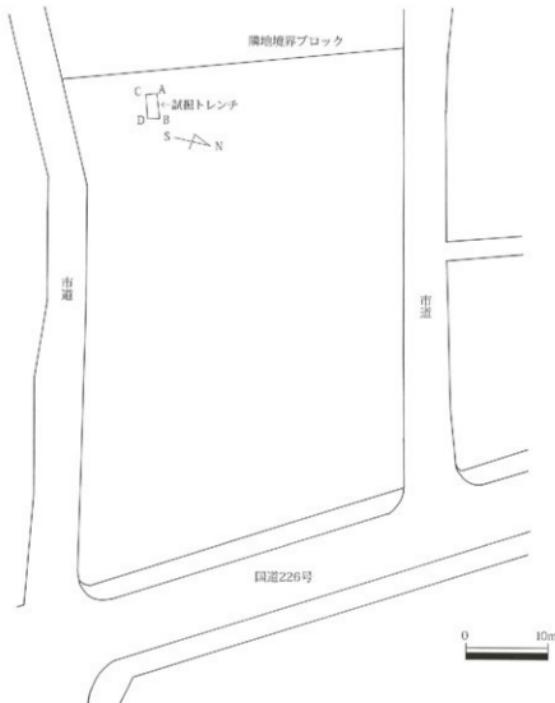


図8 調査地点とトレンチ位置図 (S=1/600)

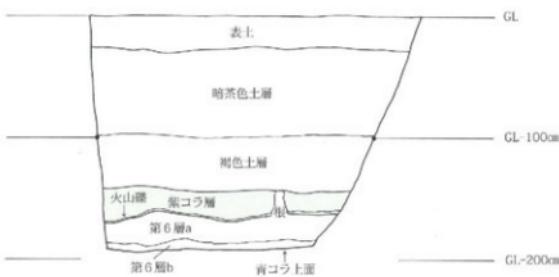
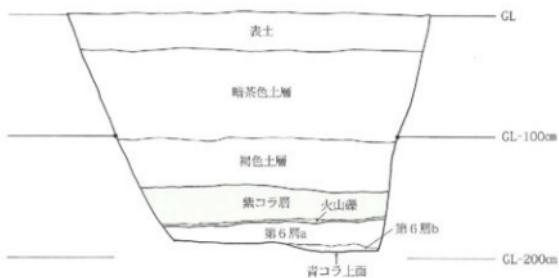
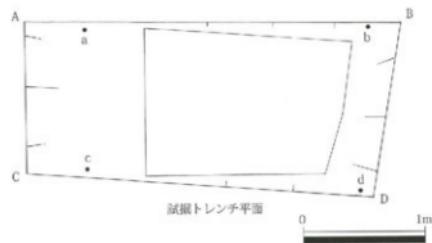


図9 試掘トレンチ平面図及び層位断面図 ( $S=1/40$ )



調査地点



試掘トレンチ全景



北壁層位断面



南壁層位断面



# 迫田遺跡隣接地編

## 第1章 経緯と概要

### 第1節 遺跡の位置と環境

迫田遺跡は、指宿市十二町堂ノ後一帯に所在する。遺跡は、山裾に近い緩やかに傾斜する海拔 20m前後の火山性扇状地上にあり、橋牟礼川遺跡から北西約 2 km の地点に位置する。迫田遺跡は、平成 9 年、民間宅地造成に伴う水道管埋設工事現場から、古墳時代の土器捨て場が発見されたことによってその存在が明らかとなった。

迫田遺跡の南には、南迫田遺跡が隣接して広がっている。南迫田遺跡は、弥生時代から近世までの複合遺跡で、ふるさと農道整備事業に伴い、平成 6 年度に確認調査が、平成 10 年度に本調査が実施され、弥生時代の遺構・遺物をはじめ、北西→南東方向に伸びる中世→近世にかけての道路が 12 条検出された。これらの道路は、繰り返し使用され補修されたものであり、道の造営以前には、溝状遺構があったことが判明した。一連の遺構は、現在同様山手側に土手を控えて構築されており、中世以降現代まで調査地点付近の景観が大きく変わることなくありつづけたことを示している。



図 11 迫田遺跡と遺物採集の位置

さて、道跡が伸びる先、迫田遺跡の西に近接する地点は、三国名勝団会に登場する光明寺の跡地と推定されているエリアである。光明寺に関連する歴史資料に南迫田の光明禅寺に保管されている板碑がある。

板碑の側面には、

□銅七口

光明開□

六月□

□法相宗□

の文字が刻まれている。この板碑は、南迫田の通称『テランヤマ(寺山)』付近の河川敷で発見されたもので、幕末から明治初めにあつた廢仏毀釈により破壊されたものと伝えられる。

碑文の内容は、「和銅七年 光明開基 六月□ 法相宗」と解され、平安時代に指宿市東方の山中に建立された光明寺のことを示すものと言われている。安政6年(1859)に建てられた「指宿東方村唐山記」という石碑には、光明寺は和銅年間(708~713)に僧定慧によって開山されたと記されており、また三国名勝団会には、文武天皇元年(697)に、法相宗を修めた僧定慧に

より開山され、十一面觀音が安置されたと記されている。

板碑は、全体の形が天文12年(1543)の「湯豊宿」の板碑に類似しており、応永年間(15世紀)に、廃退していた光明寺を再興した後に作られたものとも考えられる。

なお、これまで光明寺跡と伝えられる地点は、民間企業の所有する山林で発掘調査等は行われておらず、具体的な遺構や関連を示す遺物については明らかになっていないため、周知の遺跡地として範囲をくくるに至っていない。

## 第2節 経緯と採集遺物

光明寺跡と伝えられる地点の付近で、民間開発による私道建設が行われているとの情報を得たため、現地踏査を行ったところ、道路工事によって削られた法面に弥生土器の破片を2点確認した。法面及びその周辺を踏査したが、他に弥生土器片は確認されず、また、法面にも遺構は確認されなかった。なお、弥生土器を発見した地点の南東側隣接地で、近世から現代に帰属する陶磁器類を表面採集した。これら陶磁器類については、光明寺に関連する遺物かどうか現段階では不明である。

工事主体者と鹿児島県教育委員会文化財課に現状を報告、工事主体者には埋蔵文化財があるため、今後の工事計画によっては、文化財保護法に基づいた手続きが必要になることを説明し、理解と協力を得る旨の了解をもらつた。



山川石製の五輪塔残片



弥生土器出土位置



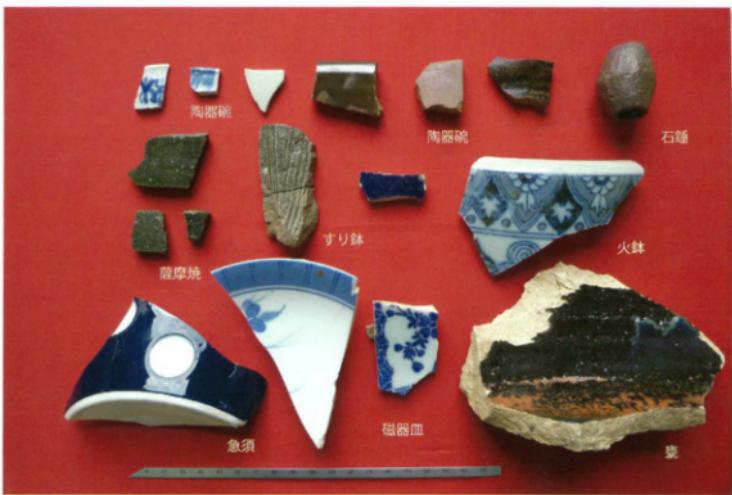
表面採集遺物写真（弥生土器片）



表面採集遺物写真（弥生土器片）



表面採集遺物写真①(瓦)



表面採集遺物写真②

## 報告書抄録

ふりがな	
書名	平成23年度市内遺跡確認調査報告書
副書名	—
巻次	—
シリーズ名	指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第50集
編著者名	渡部 駿也
編集機関	鹿児島県指宿市教育委員会（指宿市考古博物館 時遊館 C O C C O はしむれ）
所在地	〒891-0403 鹿児島県指宿市十二町2290 TEL：0993-23-5100
発行年月日	平成24年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード						
		市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
敷領遺跡	指宿市十町	46210	2-58			2011.8.16～ 2011.2.28	85m <sup>2</sup>	市内調査 （国庫・ 県費補助事業）
小田遺跡	指宿市十二町	46210				2012.2.7	3m <sup>2</sup>	民間開発

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
敷領遺跡	集落・生産遺跡・火山災害遺跡	奈良～平安、古墳時代	帶状遺構（874年段溝）、 ビット、遺跡（古墳時代）。カーボン集中範囲	須恵器蓋、成川式土器等	
小田遺跡	生産遺跡・火山災害遺跡	奈良～平安	—	—	
迫田遺跡隣接地 (光明寺跡推定地)	散布地	—	—	弥生土器片、近世陶磁器類（表揮）	



